

聖書 エフェソの信徒への手紙1章15節～23節

15 こういうわけで、私も、あなたがたが主イエスを信じ、すべての聖なる者たちを愛していることを聞き、16 祈りの度に、あなたがたのことを思い起こし、絶えず感謝しています。17 どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示との霊を与え、神を深く知ることができるようにし、18 心の目を開いてくださるように。そして、神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるように。19 また、わたしたち信仰者に対して絶大な働きをなさる神の力が、どれほど大きなものであるか、悟らせてくださるように。20 神は、この力をキリストに働かせて、キリストを死者の中から復活させ、天において御自分の右の座に着かせ、21 すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、今の世ばかりでなく、来るべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれました。22 神はまた、すべてのものをキリストの足もとに従わせ、キリストをすべてのものの上にある頭として教会にお与えになりました。23 教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。

《説教》『教会は万物の主であるキリストの体です』

◆暑い最中ですが、今日このようにご一緒に神様を礼拝できますことをうれしく思います。こちらからお見えていますと初めてお会いする方かなと思う方が一人、二人おられます。教会に長い方は「三浦綾子さん」という名前を知らない人はいないと思います。北海道の旭川の方です。もう何十年も前になりますが、朝日新聞社が1千万円の懸賞小説を募集しました。半世紀も前になりますが、1千万円は、今なら1億円くらいの値打ちがあるでしょうか、それに三浦綾子さんの『氷点』が入選したのです。三浦綾子さんは、私たちの日本キリスト教会で洗礼を受けられましたが、三浦光世さんと結婚されて、教団の旭川六条教会の会員になりました。その三浦綾子さんが、教会に初めて来られた求道者の方に、「だまされたと思って、3年は教会に通ってください」と勧められていたそうです。今日初めて来られた方々のお顔を見て、三浦綾子さんの事を思い起こした次第です。

◆今日の聖書を司会者に読んでいただきましたけれども、これをお聞きになって、教会に長い人でもこれがすーっと入って来ると言う方は多くないと思います。先々週から「エフェソの信徒への手紙」を順次読んでいますので、今日で3回目です。全体で6章あります。どんな話でも、映画でも、手紙でも、最初見落とすと、次の場面で描かれていることがよく、正しく理解できません。ですから今日の聖書も、3回目ですから、前の部分を読んで、それをおさえた上で、今日の所を読まないで、よくわからないですね。繰り返し、何十回読んでも、必ずしもよ

く分かるとは言えない、内容のものもあります。聖書の場合もそうかもしれません。そんなことですが、聖書のどこか一箇所でも分かれば、それは全体に通じるのですね。「これ、なんだ」ということに出会えば、それは聖書全体に通じる何かなのです。そのような出会いを一日も早く経験していただきたいと思います。

◆それで教会が長い人にも難しい表現の言葉を先週の説教の終わりのところで申し上げました。私が二十歳ぐらいから読んでいる本ですから、もう50年以上読んでいるのですが、スイスのカール・バルトという牧師、神学者の言葉です。こういう風に言っています。「ここに一人のキリスト者がいるという事実は、天地の無からの創造という奇跡よりも、またイエス・キリストの処女マリアからの誕生という奇跡よりも、決して小さい奇跡ではありません。」こういうふうに彼は本気で言っているのです。キリスト教二千年の歴史において、色んなすぐれた神学者が現れていますけれども、このバルトという人は、歴史に名を残すと評価されている人です。私もそう思っています。そのバルトが、一人のキリスト者がいるという事実は天地万物が何も無いところから創造されたという神の奇跡、またイエス・キリストが処女であるマリアから誕生したという奇跡よりも決して小さい奇跡ではありませんと、言っているわけです。この言葉の中にキリスト教とは何か、クリスチャンとは何者か、ということが、煎じ詰めた表現で語られていると思います。

◆人は洗礼を受けてクリスチャンになるのですけれど、キリスト者としてのその人の存在は、天地万物の創造の奇跡、キリストが処女マリアからお生まれになった奇跡と、同じレベルの奇跡なのだと言っているのです。聖書には、イエス様のなされた奇跡物語、旧約聖書には神様のなされた奇跡の数々が記されていますが、そういう中の代表として天地万物の無からの創造、これが旧約聖書。そしてイエス様のなされた奇跡は新約聖書。イエス様が処女マリアからお生まれになった奇跡と、クリスチャンがここに一人いるという奇跡は同等の奇跡なのだと言っているわけです。そういう意味では正にクリスチャンは「奇跡の人」なのです。自分のいま在るのは奇跡なのだという自覚、喜びを持たない信者はいないのです。神学者であろうが、誰であろうが、奇跡に出会って驚かない人はいません。自分の存在が、正に奇跡なのだという驚き、喜び、自覚というものを持たないならば、信者も神学者も何の役にも立たないのです。

◆今日読んでいただいたところにこういう事が記されています。「神はこの力をキリストに働かせてキリストを死者の中から復活させ、天において御自分の右の座に着かせ、すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、今の世ばかりでなく、来るべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれました」と。これはキリストのことなのです。こういう存在が他にあるでしょうか。過去、現在、未来、すべてにおいてあらゆる力あるものの上に神はキリストを置かれたのだというのです。22節「神はまた、すべてのものをキリストの足もとに従わせ、キリストをすべてのものの上にある頭として教会にお与えになりました。教会はキリストの体であり、全てにお

いてすべてを満たしてしる方の満ちておられる場です。」すべてと言いますから例外なくすべてです。神様は、御自身がお持ちの全ての善いものをキリストにお与えになり、キリストはすべてにおいてすべてを満たしている御方であられ、その御方が満ちておられる場が教会なのだ。このように使徒パウロは言っているわけです。

◆このエフェソの信徒への手紙はそういうことを冒頭からず一つと書いております。もう既に読んだ1章3節を御覧いただきましょうか。「わたしたちの主イエス・キリストの父である神はほめたたえられますように。神は私たちがキリストにおいて天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました」とあります。わたしたちはキリストを信じるということにおいて地上の朽ちゆくものではない、何があっても朽ちないところの天のあらゆる霊的な祝福でいま満たされているのです。わたしたちはキリストを信じることに、地上の朽ち行くものではない、何があっても、何が起きても、絶対崩れない天のあらゆる霊的な祝福で満たされているのです。このように使徒パウロは本書の冒頭で宣言するのです。こういう霊的な祝福で満たされている存在がキリスト者なのです。

◆私達は、ユダヤ人の日常挨拶の言葉が、「シャーローム」＝「平和がありますように」という言葉だと聞いて来ました。しかし、もう一つの挨拶言葉がある事を知らされました。それは、「驚きに満ちている」「不思議な事」を表す言葉で、「ペレー」というヘブライ語です。英語なら「ワンダフル！」と云うところだとありました。この事を聞いて、私はこの「ペレー」は英語では「アメージング・グレース！」だと思いました。つまり「素晴らしい恵み」だと言ってよいでしょう。詩編第77篇11～12節にこうあります<口語訳>。「わたしは主のみわざを思い起す。わたしは、いにしえからのあなたのくすしきみわざを思いいだす。わたしは、あなたのすべてのみわざを思い、あなたの力あるみわざを深く思う。」この『くすしきみわざ』が、「ペレー」というヘブライ語で、これがもう一つの挨拶言葉だということです。「主のくすしき御業」それが「ペレー」です。互いに「ペレー」と挨拶を交わす時、この自分自身が、自分の存在が、そして、互いが、今・ここにあるのは、神様の奇しき恵みなのだと思わせられるわけです。「シャーローム」によって、わたしたちは平和に包まれます。そして「ペレー」によって神様の奇しき御業としての自分自身を新たに覚えます。このような意義深い挨拶語があるでしょうか。

◆今週の水曜日19日は、私たちの愛する竹村好香姉が召されて丁度2年の記念日に当たりません。今日はお嬢さんの狩野絢子姉が出席されています。2年前の葬儀を思い起こします。竹村姉は、葬儀において「アメージング・グレース」歌って欲しいと希望しておられました。それも「どなたかソロで歌って下されば嬉しいのですが」と「葬儀の覚書」に書いておられたので、式場での突然の指名でしたが、岩田隆子姉に歌って頂きました。今、上で申しました「ペレー」という挨拶語は、英語に訳せば、正に「アメージング・グレース」ですね。このような感嘆の

思いで、自分自身を自覚できる人こそが、神様の奇しき御業である自分自身に驚くことが出来る人こそが、誠に幸いな人と言えるのではないのでしょうか。竹村好香姉は百歳で召されたのですが、今、絢子さんが座っておられる席が、礼拝の時の定席でした。今もそこに座っておられる感じがいたします。葬儀において、「アメージング・グレース」を強く願われた姉妹は、本当に幸いな人、幸いな人生を送られた人だと思います。

◆1章15節、「こういうわけで、あなたがたが主イエスを信じ、すべての聖なる者たちを愛していることを聞き、祈りのたびにあなたがたのことを思い起こし絶えず感謝しています。」「エフェソ」は、当時の異邦の大都会です。そこで、異邦人がキリストを信じる者となった。そして、そこに教会ができたわけです。その事を聞いてパウロは本当に喜び、感謝しています。ですから一人のクリスチャンが生まれるということは、どれほど感謝してもし過ぎることはない奇跡なのですね。その奇跡を神様は起こして下さったのです。感謝するのは当然ですね。17節、「どうか、私たちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示との霊を与え、神を深く知ることができるとにし、心の目を開いてくださるよう。そして神の招きによって、どのような希望が与えられているか。聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるよう。」このような祈りをパウロはささげているわけです。神様の恵みは驚くべきものですが、恵みを何か当然のことのようと思う時、人は奇しき恵みから逸れてしまい、比較すべき何ものもない幸いを失うのです。

◆ここに旧讃美歌529の楽譜を持っています。先日も一緒に歌いました。“ああうれし、わが身も、主のものとなりけり。うき世だにさながら、あまつ世のここちす。(おりかえし)うたわでやあるべき、すくわれし身のさち、たたえでやあるべき、みすくいのかしこさ”。このおりかえし句は2番でも3番でも歌うのですが、私は、3番をこのように変更したいと思えます。“うたわでやあるべき、すくわれし身のさち、つたえでやあるべき、みすくいのかしこさ”と。わたし達が奇跡として頂いた神様の奇しき御業を歌い・讃え・伝えないではおられないのです。この「ペレー」という挨拶語にこめられたものが、万国共通の驚くべき、感謝すべき事柄になった時、神の国が到来したということになると思います。今一度、わたしたち一人一人が、驚くべき、奇しき御業としての、奇跡としての私なのだと、自覚し、感謝し、神様を讃え、伝えてまいりましょう。

◆お祈りいたします。恵み深い主イエス・キリストの父なる神様。わたしたちがあなたの憐みのゆえにあずかっているこの信仰の恵みの事実は計りしれない奇跡であることを覚え、感謝いたします。どうか日々、刻々、この恵みを感謝しつつ、そしてまた、わたしたちが出会うすべての人にこの恵みを伝え分かちつつ、あなたの導きのもとに、信仰から信仰へ、感謝から感謝への道を歩ませてください。この祈り主の御名を通しみ前におささげいたします。アーメン。